看護作業の質的向上に関する研究

—看護婦・患者間のコミュニケーション中心に—

○関 宏幸、魚 埴嶺、辛島光彦、齋藤むら子（早大・理工）

A study on quality improvement of nursing service

H. Seki, J. Au, M. Karashima & M. Saito (WASEDA UNIV.)

【1】研究目的

本研究では、看護作業の質的な面、特に、看護婦と患者のコミュニケーションに注目し、看護婦のコミュニケーション形態と患者がもつ看護婦の理想像について調査し、看護作業の質的向上についての指針を得ることを目的とする。

【2】研究方法

(1) 調査対象

質問紙調査法を用い、表1に示す日本国内の3箇所の病院で調査を行った。

経営形態	病院A 民間総合病院	病院B 私立大学 附属病院	病院C 私立大学 附属病院	合計
ベッド数	507床	419床	952床	
看護婦 患者	129名 87名	244名 147名	457名 226名	830名 460名
合計	216名	391名	683名	1290名

(2) 調査期間

平成3年6月～平成3年7月末。

(3) 調査内容

以下の項目について調査を行った。なお、調査の対象者は、調査Iは看護婦、調査IIは患者とした。

【調査I】看護婦のコミュニケーション形態について

看護婦の患者に対する会話の目的、内容、頻度、心構え、情緒的な要因等についての23項目を5段階評価で調査した。

【調査II】看護婦の理想像について

患者の持つ「良い看護婦」のイメージについて、性格、雰囲気、活動性、信頼性、勤勉さ等についての57項目を7段階評価のSD法により調査した。

【3】調査結果及び考察

各調査について、それぞれ主成分分解による因子分析を行い、VARIMAX回転後、因子の解釈を行った。

(1) 調査I

①因子分析の解釈

12個の因子を抽出し（累積寄与率72.2%）、固有値が1.0以上の第VI因子まで解釈を行った（表2参照）。

因子分析の結果、看護婦の患者に対するコミュニケーションの形態は、第I因子にみられるようにコミュニケーションの看護婦自身の自己評価は高いが、反面、第III因子の情緒的要因によるコミュニケーシ

ョンの障害、第IV因子にみられる話題の貧弱さ、第VI因子のQ18にみられるコミュニケーション時間の欠如など、矛盾する要因も多くみられる。つまり、表面的にはコミュニケーションは円滑に行われているようだが、実際には、サービスを受ける患者にとって、必ずしも良好なコミュニケーションの形態になっていないのではないかと推測される。

表2：調査Iの因子の解釈（※：因子負荷量が負）

因子	因子の解釈	質問項目	寄与率
I	コミュニケーションの自己評価・心構え	Q8：患者とのコミュニケーションはできている Q11：笑顔は絶やさない Q5：患者はあなたの態度に満足している Q10：患者とは分け隔てなく接することができる	15.6(%)
II	コミュニケーション態度	Q21：患者の応答を気にする Q15：患者との会話から得るものばかりさんある Q20：患者と話をすることは大切だ	10.2(%)
III	コミュニケーションの情緒的要因	Q17：しつこく話しかけてくる患者は嫌い Q13：患者に好き嫌いがある Q9：寝ているとき、患者と話さない	7.0(%)
IV	話題の貧弱さ	Q6：患者との会話が決まっている Q4：会話が流暢でなくさんある	6.5(%)
V	コミュニケーション内容・頻度	Q3：医師以外の話が多い Q2：患者とよく喋るほうだ	5.0(%)
VI	コミュニケーション頻度・時間	Q19：会話の頻度は患者によって異なる Q18：患者とのコミュニケーションの時間が少ない	4.8(%)

②属性別平均因子得点の算出及び分散分析

(1)～①で

抽出した各因子別の平均得点を属性別に算出し、その属性を要因とした分散分析を行った。結果を表3に示す。

表3：調査Iの分散分析結果

属性	病院別	病棟別	勤務形態別	超過時間別	資格別	役職別	経験年数別	年齢別	学歴別	婚姻別
因子	I	II	III	IV	V	VI				
I	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..
II	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..
III	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..
IV	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..
V	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..
VI	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..

(**：1%有意、*：5%有意、#：10%有意)

(2) 調査II

①因子分析の解釈

18個の因子を抽出し（累積寄与率70.8%）、固有値が1.0以上の第XIV因子まで解釈を試みた（表4参照）。

第I因子は、抽出された項目が22項目と多く、解釈に困難をきたしたため、4つの下位因子にわけ、因子の解釈を行った。

因子分析の結果、患者の持つ「よい看護婦像」とは、まず、第Ⅰ因子にみられるように、模範的・表面的な理想像が浮かび上がるが、第Ⅱ、Ⅴ因子の因子の抽出により、実際には、患者は、看護婦に対して父親的・指導的な役割をしてもらいたいといった強い依存心が出ている。これは、肉体的・精神的弱者である患者が深層で持っているものに起因しているのであると考えられる。また、患者が看護婦に期待するものは、第Ⅵ因子にみられる「医療的側面」ばかりでなく、第Ⅰ因子の下位因子でみられるように、「人間的な触れ合い」といった「情緒的側面」により大きな期待をしていると思われる。

表4：調査Ⅱの因子の解釈（※：因子負荷量が負）

因子	因子の解釈 下位因子	質問項目	寄与率
Ⅰ 模範的看護婦像	I-1 看護婦の資質と態度	Q50:上品な	26.8(%)
		Q51:知的な	
		Q49:有能な	
		Q37:女性的な	
	I-2 人間的な触れ合い	Q25:活動的な	
		Q28:勤実な	
		Q21:親切な	
		Q27:生き生きとした	
	I-3 看護婦の教科書的イメージ	Q15:親しみやすい	
		Q32:聞いてくれる	
		Q14:あたたかい	
		Q33:あいまいな	
	I-4 性格Ⅰ	Q10:こきない	
		Q12:あつくるしい	
		Q34:長続きする	
		Q35:辛抱強い	
Ⅱ 父親的・指導的な役割	Q7:父親的な	Q6:批判的な	5.9(%)
		Q16:慎重な	
		Q54:友人的な	
		Q13:繊細な	
	Q11:忙しい	Q17:若い	
		Q17:せっかちな	
		Q42:尻軽な	
		Q9:重々しい	
	Q18:しかってくれる	Q13:弱い	
		Q56:学問的な	
Ⅲ 看護婦の外見イメージ	Q11:忙しい	Q17:若い	4.4(%)
		Q17:せっかちな	
Ⅳ 八方美人の要素	Q42:尻軽な	Q9:重々しい	4.0(%)
		Q18:しかってくれる	
Ⅴ 看護婦への依存心	Q18:しかってくれる	Q13:弱い	3.3(%)
		Q56:学問的な	
Ⅵ 医療的側面	Q15:専門的な	Q3:やさしい	2.8(%)
		Q2:つまらない	
Ⅶ やさしさ	Q3:やさしい	Q1:明るい	2.6(%)
		Q5:声が大きい	
Ⅷ まじめさ	Q2:つまらない	Q1:明るい	2.5(%)
		Q5:声が大きい	
Ⅸ あかるさ	Q5:声が大きい	Q14:さびしい	2.3(%)
		Q40:神経質な	
Ⅹ 性格Ⅱ	Q40:神経質な	Q38:こまかい	2.1(%)
		Q11:新しい	
Ⅺ 新しさ	Q11:新しい	Q8:加齢さ	2.1(%)
		Q23:おちついた	
Ⅻ 加齢さ	Q8:加齢さ	Q24:薄化粧の	1.9(%)
		Q26:ほげしい	
Ⅼ おちついた	Q23:おちついた	Q24:薄化粧の	1.8(%)
		Q26:ほげしい	
Ⅽ 解釈不能	Q24:薄化粧の	Q26:ほげしい	1.8(%)
		Q26:ほげしい	

②属性別平均因子得点の算出及び分散分析

(2)-①で抽出した各因子別の平均得点を属性別に算出し、その属性を要因とした分散分析を行った。結果を表5に示す。

表5：調査Ⅱの分散分析の結果

属性	病院別	性別	年齢別	入院回数別	入院期間別
因子					
I					
II					
III					
IV					
V					
VI					
VII					
VIII					
IX					
X					
XI					
XII					
XIII					
XIV					

(**:.1%有意、*.5%有意、#:10%有意)

(3)重回帰分析

看護婦のコミュニケーション形態が患者の看護婦像に与える影響を求めるため、病院一病棟が一致する箇所、調査Ⅱで求められた各因子毎の平均因子得点を被説明変数、調査Ⅰで求められた各因子の平均因子得点を説明変数とし重回帰分析を行った。

決定係数 R^2 の比較的高い(0.4以上)回帰式の偏回帰係数を表6に示す。また、積率相関係数の有意性検定も行い、同時に示した。

分析の結果、看護婦のコミュニケーション形態は患者の看護婦像に大きな影響を及ぼしていると言える。特に、調査Ⅰの第Ⅲ因子「看護婦の情緒的要因」は、患者の看護婦像に密接に関連し、調査Ⅱの第Ⅰ因子「模範的看護婦像」、第Ⅶ因子「やさしさ」、第Ⅹ因子「性格」、第Ⅺ因子と有意に相関があるといえる。このことは、看護婦の気分や患者に接する時の心構えなど情緒的要因が、直接的に患者の看護婦に対する認識に反映するものと考えられる。

表6：偏回帰係数

	調査Ⅰの因子	調査Ⅱの因子	調査Ⅲの因子	調査Ⅳの因子	調査Ⅴの因子	調査Ⅵの因子	調査Ⅶの因子	調査Ⅷの因子	調査Ⅸの因子
調査Ⅰの因子	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
調査Ⅱの因子	0.092	-0.074	0.277	0.178	0.295*	0.222	-0.258	-0.618	-0.618
調査Ⅲの因子	-0.393	-0.249	-0.187	-0.652	-0.508*	-0.630	1.077	1.114	1.114
調査Ⅳの因子	0.498*	0.198	-0.337	1.133*	0.027	0.774*	1.157*	-1.033*	-1.033*
調査Ⅴの因子	-0.023	-0.014	0.403	0.812	0.014	-0.216	0.492	0.051	0.051
調査Ⅵの因子	0.124	0.174	0.349	-0.064	0.506**	0.218	-0.789	-0.072	-0.072
調査Ⅶの因子	0.185	-0.003	-0.001	0.718	0.166	-0.210	-0.032	-0.068	-0.068
決定係数	0.563	0.434	0.501	0.632	0.602	0.495	0.491	0.429	0.429

(積率相関係数の有意性検定が、**:.1%有意、*.5%有意、#:10%有意)

【4】結論

本研究により、看護婦のコミュニケーション形態の因子構造、患者からみた看護婦の理想像が得られた。また、看護婦のコミュニケーション形態との関係から、看護婦の患者への接し方が、患者のもつ看護婦像に密接に関連することが判明した。